



な  
け  
な  
し  
の  
か  
ね

奈良工業高等専門学校  
現代視覚文化研究会  
二〇一九年度 秋会誌

## まえがき

はじめまして。新入生の皆様、ご入学おめでとうございます。現代視覚文化研究会、略して『視現研』の会長の「しゅう」と申します。

本日は2019年の秋会誌「なけなしのかね」をお取りいただきありがとうございます。

「げんしけん」とは？ 高専祭当日、科展にお越しいただいた方は、ひよつとすると部員からどのような団体かの説明を受けていることかと思えます。が、ご存知ない方のために説明させていただきます。

げんしけんでは、基本的に「小説」「イラスト」「音楽」「ゲーム」の4つの班に分かれて、日々様々な作品を制作する——いわゆる、「創作活動」に動んでいます。ちょうど今、ご覧いただいている本誌では、小説班とイラスト班の部員が制作した作品が掲載されており、また、本誌と同時に頒布を行ったコンピレーションCDには、音楽班とイラスト班が関わっております。残念なことに、今回の展示では諸事情によりゲーム班の展示は控えめでしたが……それでも部員一同が締め切りに追われつつも、楽しんで作品づくりをしていたと（勝手に）思っています。

特徴としては、ただただ自由なのが挙げられます。毎回これしか言っていないので、取り柄が「自由」なこと以外に無いと思われるかもしれませんが、そのくらい自由なのがこの同好会なんです（いどころは他にもいっぱいあります）。

さきほど、「4つの班に分かれて」と書きました。しかし実は、掛け持ちも、他の班に作品を提出するのも、4班のつくる作品以外の形態の作品を提出するのも、なんとOKなんです。これは本誌にも表れていて、例年まで会誌は小説とイラストの二つで構成されていたのが、今年度から「コラム」を執筆することになりました（コラム自体は過去の会誌にもありましたが）。

げんしけんは、このような環境で活動しています。しかし、説明するよりも実際に見ていただいたほうがわかりやすいと思います。次のページからは、部員たちが丹精込めて作った小説とイラスト集になっております。すべて部員それぞれの個性が溢れた作品たちですので、ぜひ隅々までご覧ください！

最後に宣伝です。

視現研は「課外活動共用施設」というところで活動しています。体育館の横にある小さい建物です。なにげに結構広めの部室をお借りしているので、資料なんか大量に置いてあります。

ホームページ (<http://mnc-mvccsaku.ne.jp/>) もあります。♡♡

では、過去の会誌や作品を見ることができます。あとは、Twitter (@mnc\_mvcc3) もやっていますので、ぜひフォローをお願いします。

もしいまご覧いただいている方の中に、奈良高専を受験予定の方がいらつしやったら、「こんな部活あったな……」と頭の片隅にでもいれていただけると嬉しいですよ。

以上、ここまでお読みいただきありがとうございます。秋会誌、「なけなしのかね」を最後までごゆっくりとお楽しみください。

# もくじ

## 小説

- 4.英雄譚の誰も知らない外伝 あしっどさん
- 6.陽炎の檻 タニイム
- 8.虚言症 若葉
- 12.時を越える夢 如月 吟
- 17.嘘誠 キツタヌ
- 20.真綿で蛇を生殺し キツタヌ

## イラスト

- 24.緋色
- 25.Mino
- 26.あっこどん
- 27.しょぼんぬ
- 30.シルフィイ
- 31.冬月

## コラム

- 34.kuroma
- 36.あっこどん

表紙 あしっどさん

編集 タニイム

扉絵 しゅう

**NOVEL**

## 英雄譚の誰も知らない外伝

あしつとさん

世界には、様々な物語がある。それが史実が幻想かはさておき、物語の最も有名でシンプルなジャンルが英雄譚だろう。勇者が魔王を打ち倒す、輝かしい御話。その最後の戦いの前にあつた、歴史に残されていない小さな戦争。これはそんな物語。

「よし…行くぞ」

周りに誰もおらず、異常に静かな空気を紛らわせるために、誰に聞かせる訳でもない独り言を呟き、扉に手を掛ける。

勇者——五年前、突如として人類に宣戦布告した魔王を倒す者である俺が今いるここは、魔王が住まう城の最上階——の、一つ下。

仲間達は俺をここまで行かせるため、更に下の階で魔王の配下の魔族と戦っている。つまりは、この階に居るであろう敵と、最上階の魔王を俺一人で倒さなければならぬということだ。

仲間の思い、人類の希望を背負っている以上、負けるつもりは毛頭ない。——それでも、さつきまで激戦を繰り返していたとは思えないこの静けさは落ち着かない。だが、今更怖気付く訳にもいかない。深呼吸をして半ば無理矢理に心を落ち着け、扉を開き、大広間へと入る。

大広間には、高い天井を支えるための太い柱が数本と、ちょうど俺が入ってきた扉の反対側の位置に扉——魔王がいる最上階に繋がっているのだろう——があり、その扉を守るように一人の女が立っていた。

その事実には、俺は驚きを隠せなかった。相手が一人だから？違う。女だとは思っていないから？違う。人間が最上階の一つ下の階にいる——つまり、魔王が最も信頼を置く者が人間である、ということに。

様々な理由で魔族に与する人間はいるにはいた。しかし、そのほとんどが捨て駒扱いだったのだ。実際、魔王城とその周囲には魔族に協力的な人間は一切いなかった。俺はいきなり切りかかる気にはなれず、少し話し合うことにした。

「あなたは、何なんだ？何故こんな所にいる？」

「私は、我が主の命により、この扉を守る者です。故に、この先に進むと言うのなら一切容赦は致しません」

素晴らしい、彼女は魔法で大剣を生み出し、両手で下段に構える。今の発言は間違いなく本気だろう。少し警戒を強めながら距離を詰め、次の質問をする。

「あなたは人間だろう？何故人間が魔王城の一番重要な場所を守っているんだ」

「それは、十年前に故郷が滅ぼされ、野垂れ死ぬしかなかった私を、我が主が救ってくれたからです。以来、私はずっとあの御方と共にあります」

その言葉を聞き、足が止まる。十年前、だと？それは、まさか——

「ええ、あの日は見ました。空から降り、全てを焼き尽くした滅びの一滴。ただの好奇心で同族を大勢殺す人間のおぞましさを」

十年前の虐殺。それは、ある科学者が興味本位で作りに出した爆薬を、威力が見たいからという馬鹿げた理由で飛行機に括りつけ、そのままが大勢いる都市に落とし、その都市の人口の九割以上を殺した、大事件だ。その科学者はすぐさま処刑されたが——

「あなたは、人類に復讐したいのか」

それ以外の理由は思いつかなかった。むしろ、それしかないと思つた。だが、返つてきたのは予想外の言葉だった。

「いいえ。全く。」

何故だ。

「じゃあなんで人類に宣戦布告をした？あんたは、魔王は、何を考へてる？人類が憎いんじゃないのか!？」

分からない。仲間は皆口を揃えて魔族は人類を憎んでいると言つていたが、今まで戦つてきた魔族には憎しみは感じられなかった者の方が多かった。こいつも、復讐する気はないと言ふ。魔王は、何を目的として宣戦布告したんだ？

「……人類は、技術を、文明を、際限なく高めてきました。どこまでも、どこまでも。それ自体は悪いことではないでしょう。でも、その高めたものを、同じ種族で殺し合うために使っている。——人類は世界を支配する種族だ、と言つたりしていますが、人類が今このままであり続ける限り、同族殺しは絶えず行われ、永遠に平穏など訪れない。ならば、全ての人類を支配、管理することにより一切の争いが存在しない平和な世界を作る。それが、我が主が掲げる思想であり、私がこちら側についた理由です」

あまりに壮大な目的に、絶句するしかなかった。

「な……！そ、そんなことできる訳ないだろう！途方もない幻想にしか過ぎない！それに、誰かの支配下での平穏なんて、それは結局仮初のものじゃないか!」

そうだ。そんなこと、できるはずがない。しかも、人類を管理するだつて？そんな事、許せるはずがない。

「ええ、ただの幻想、机上の空論でしかありません。その過程で犠牲も出ます。それでも——それでも、戦乱によつて命が、故郷が奪われることがなくなるなら、全てを奪われる人がいない世界なら、私はそれを見てみたい！誰も、何も失われない世界を!」

その、確固たる意思に気圧され、後ずさる。だが——ああ、今、ようやく分かつた。この戦いは、いや、そもそも戦いというものそのものは、どちらかが善、どちらかが悪、という訳じゃない。どちらも善。どちらも正義。決して譲れぬものにかけて、どちらか一方の道を勝ち取るためのもの。ならば、逃げる訳にはいかない。俺は——

「俺は、まだ分からないことだらけで、悩んでばかりだけれど。それでも、俺は、今の人類を救いたい！その希望になりたい!」

そう言い、大きく一歩踏み出しつつ、剣を抜く。魔王の思想は、彼女の思いは、とても輝かしい。世界のどこだろうと不幸な人など一人もいなくなるだろう。だが、他者から与えられるだけの幸せなど、空虚なだけだ。そんな絶望もなければ希望もない世界など、俺はゴメンだ。

「ならば、戦いましょう。互いの理想を、希望をかけて」

そう言い、彼女は戦闘態勢を取る。凄まじい殺意。本当に同じ人間なのかと疑いたくなる。だが、それに怯まず、更に一歩を踏み出しつつ、短い言葉を告げる。

「ああ。戦争を、始めよう」

了

## 陽炎の檻

タニイム

今日もまた、幸せな一日だった。それこそ、本当にこんなに幸せでいいのか、不安になりかけるくらいに……。

『彼』はそんな私を幸せにしてくれます。それはまるで夢のようで、だからどんな不安も気づく前に消えてしまうんです。

『彼』と出会う前の私には、この幸せは想像できないもので、だからこそ、『彼』にもらった幸せを、私から『彼』に返したいのですが、気がつけば『彼』に私が幸せにされています。

始めの頃は、拙いながらもちゃんとお仕事できていました。

しばらくして、かなり面倒でややこしい手順を指定したお仕事が多くなって、少し辛くなってきました。

それに慣れて少し経つと、わざわざ時間がかかる方法を要求するお仕事が多くなって、他の事に影響が始めました。

このままじゃダメだと思い始めた頃に、あの飲み物が送られてきました。今思い返せば怪しい限りなのですが、あの時の私は何も考えられなかったように思います。

……そこから先は、『彼』と出会うまでの間の事はほとんど覚えてません。

でも、だからこそ『彼』の純粋な優しさと愛情に惹かれたのかも少しらないです。

……何か、とても大切なことを忘れてしまっているような気がしますが、……、思い出せません。

……そういえば、『彼』は毎日私のお仕事を手伝ってくれますが、辛くないのでしょうか。明日にでも、それとなく聞いてみようかな……。

明日……、『彼』と何をしようかな。この間みたいに、また新しい料理を教わるのもいいけど、服を作ってみるのも楽しそうだし……。

今日もまた、幸せな一日だった。まだ、全然足りてないけれども、それでも今日一日だけ見れば十分くらいに……。

『彼女』はもつと幸せになるべきだ。ずっと蝕まれていたあの悪夢から解き放たれて、不安を感じる事もないくらい幸せに。

『彼女』と出会う前の僕には、何かが欠けていて、だからこそ、『彼女』と出逢って満たされた想いを、『彼女』にも感じて欲しいから、僕の手で『彼女』をもつと幸せにしたい。

昔はまだ、夢も希望もすぐ近くにあるように見えていた。

成長と共に、周りと同じ事に違和感を覚え始めて、他人と語り合うよりも自分一人で居る事が増えだした。

一人が気楽になりだした頃、親しい人と離れることになって、独りになってなつてしまった。

第二次性徴期の頃には、『夢や希望や願い』を亡くしてしまっていて。今だから言えるけど、あの頃の自分は欠けたものを埋める為に暴走してたな。

……そこから先は、『彼女』と出会うまで空白の日々を過ごしていた。

でも、だからこそ『彼女』の健気な努力と誠意に惹かれたんだと思う。

……何か、とても大切なことを忘れてしまっている気がするんだけど、思い出せないな。

……そういえば、『彼女』は今までずっと独りで居たのなら、辛く無かったのかな。明日にでも少し聞いてみるのもいいかもしれない……。

明日……、『彼女』と何をしようかな。この間みたいに、料理を教えるのもいいけど、編み物やお菓子作りも楽しんでくれるかな……。

……明日考えましようか。……こんなふうに明日のことを考えて楽しみになることなんて、『彼』と出会うまでありませんでしたね。……だから、私のことを妬んで、僻んで、羨んで、引きずり落とそうとしている人達には、陽炎のように儂い檻の中に居る私を見て満足してもらいましようか。『彼』との時間を邪魔されたくありませんし。

『彼』はまだまだたくさん私に教えたいことがあると言っていました。私は今のままでも十分すぎるほどに幸せです。

『彼』が教えてくれることは、ほとんどが私の知らない事ですし、美味しいご飯も、素敵な服も、『彼』と出会って初めて知ったことばかりだから……。

こういうと、『彼』は凄く悲しそうな顔をして、私をぎゅっと抱きしめて頭を撫でてくれます。その手はとても優しく、その目は何か大切なものをなくしたみたいで、『彼』の心臓の音は、どんな時でも私を安心させてくれます。

……まだ、時々『彼』と出会う前の、お仕事を続けて、私が私じゃなくなってしまうような夢をみる必要があります。そんな時は大体『彼』のベッドに潜り込んで、『彼』に抱きついて寝なおすんですけど、『彼』はいつ行っても優しく抱きしめてくれて、優しく撫でてくれます。

私は、そんな優しい『彼』が大好きで、だからこそ、『彼』からもらったこの幸せを、私も『彼』に返せるように頑張っています。

……その度に、『彼』からもっともっととたくさんの幸せをもらって、幸せの中で溶けちゃいそうになります。

叶うのなら、これからもずっと、『彼』といっしょにすごせますように。

ふあ〜ふ……。今日はそろそろ眠りましようか、おやすみなさい。

……願わくば、彼らの未来が

……明日決めよう。……こんなふうに明日のことを考えて楽しみにするだなんて、『彼女』と出会うまで無かったよな。

……だから、僕は僕であるために、襲い来る不幸をうけてめて、迫る悪意を閉じ込めよう、陽炎のように捉えられず、出口も存在しない、脱出不能な檻の中へ……。『彼女』との時間は邪魔されたくないからね。

『彼女』はもう十分幸せだと言っているけれど、僕にはまだまだ教えてあげたいことがたくさんある。

『彼女』は普通の幸せすら知らずに育ったみたいだから、その分を取り戻すぐらいに、『彼女』の過す日々の全てに当たり前の幸せを散りばめて……。

『彼女』とそんなことを話していると、いつも気が付けば彼女を抱きしめて、頭を撫でている。その髪はとても柔らかで、その香りはなくした何かをうめるみたいで、『彼女』の体の重さは、僕をここに近づきとめていてくれる。

……まだ、時々『彼女』と出会う前の、何にもなくて、僕が僕じゃなくなってしまうような頃の夢を見ることがある。そんな時は大体気がつけば『彼女』が僕と同じベッドにいて、僕にくっついていてくれるんだけど、『彼女』は僕が抱きしめて撫でてても何も言わないでくれる。

僕は、そんな愛しい『彼女』が大好きだから、『彼女』が得るべき『無償の愛』を届けながら、『彼女』と一緒に過ごしたい。

……その日々で、『彼女』からたくさんの幸せをもらって、その分だけ『彼女』をもっともっとと幸せにしたくなる。

叶うのなら、これからもずっと、『彼女』といっしょにすごせますように。

ふわ……。今日はそろそろ眠ろうかな、おやすみなさい。

幸福に満ち溢れんことを……。

## 虚言症

若葉

私は嘘つきではない。

しかし、人間は全員が嘘つきだ。なので、私はいつも肩身が狭い思いをしている。

なので、私は親友に相談を持ちかけた。

「どうして人は何でもかんでも嘘をつくんだらうね」

私の突然の質問に、冷静な返事が返ってきた。

「え？ さ、さあ。その方が自分にとつて都合がいいからじゃないの」

「嘘ついたってメリットないじゃん」

「メリットはあるよ。正直に話したら辞任させられるから嘘の報告をするし、正直に話したら逮捕されるから「やってない」なんて嘘をつくの」

「ふーん、貴方も私に嘘ついてるね」

「私にメリットないからついてないよ」

流石は私の親友。言うことが他の人とは違うね。

「とうるか、私は貴方の親友じゃないんだけど」

「え、それは知らなかった」

「嘘をつくな」

私は親友の行く末が心配になった。

「私は嘘つきじゃないよ。メリットがないもん」

「それは……確かにそうね。嘘をついてまで、初対面の私に付き纏うメリットなんて思い当たらないわ……」

「思い当たらないのはおかしいよ」

「はあ？ ……ああ、成程、そういうことね。あなた、とんでもない嘘つきね」

「どうして分かってくれないの？」

「さあね。とうるか、貴方が私に嘘をつくメリットってなに？」

「メリットなんてないけど、あえて言うなら忙しいからかな」

「……つまりは暇潰しってことね」

「それは違うよ」

「はいはい」

暇潰しじゃないんだけどなあ。でもまあ、とても有意義な時間だったことは確かだね。

「私は疲れただけなんだけど」

「私も疲れたよ」

「私は貴方に憑かれたし、懐かれたわ。慰謝料を要求しないと」

「その貴方って人は良い人だね」

「全くだわ。そんなわけで、弁護士のところに行くから、また今度ね」

「法廷で待つてるね」

「期待しないでおくわ」

重要な会話が終わり、親友と別れた。親友はいつも通りだったので私は安心した。

法廷に着いた私は、何をするでもなくブーツと立っていた。

「君、ちよつといいかな」

声のする方を向くと、お巡りさんが座っていた。

「私、何もしてないよ？」

「コンビニの駐車場で二時間以上縄跳びをしてるよね？」

「私は法廷でブーツとしてるだけだよ」

「どう頑張つてもここは法廷には見えないし、ブーツとはしてないよね？」

でも犯罪は犯してないし、別にいいじゃん。

「駐車場はお店の土地だから、公園とかでやってくれないかな」「犯罪じゃないからいいじゃん」

「住居侵入罪の可能性があるから、トラブルにならない内に違うところに行こうか」

「なんと、縄跳びは犯罪だったのか。」

「というか、そろそろ縄跳びを止めよつか」

「確かに、疲れてきたかも」

「そりゃあ、二時間以上も飛んでるからね」

「理由はあるんだけどなあ」

「そうなのかい？」

「親友に「法廷で待つ」って言われたの」

「……うん？」

「ここは法廷でしょ？」

「違うけど……あー、とりあえず縄跳びを止めて、こつち来ようか。危ないからね」

「危なくないんだけどなあ」

お巡りさんの言うことは全て正しいから、言われた通りにしよう。

「うん、言う通りにしてくれてありがとう。この道を真っ直ぐ行つたところに公園があるから、そこでやろうか」

「お巡りさんも来て欲しいな」

「いいよ。じゃあ公園まで一緒に行こうか」

私は縄跳びを持って近くの公園までやって来た。

「あれ、縄跳びは？」

「持つてるよ」

「いや、持つてないよね？ いつの間に無くしたんだろう」

「無くした物は二度と戻ってこないんだし、今あるもので楽しもうよ」

「意味は分からないけど、この子を放っておく訳にはいかないし・

……君、お父さんかお母さんと連絡できる？」

「お父さんもお母さんもないよ」

「えっと……家には誰と住んでるのかな？」

「私は家に住んでないよ」

「ええ……困つたな」

あれれ、お巡りさんを困らせるつもりはなかったんだけどなあ。どうにかしようと思いを捻らせていると、知らない少女の声が聞こえた。

「あ、やつと見つけた」

「知り合いかい？」

「うん、そうだよ」

「ごめんなさい、お巡りさん。私、この子の妹です。姉さん、嘘しか言わないんです」

「私は嘘なんてついたことないよ」

「なるほど……」

嘘ばかりつくこの少女は、私のお姉ちゃんだ。

「おや、君が持つてるのは……」

「すぐそこに落ちてあつたのを拾いました。これのおかげでここに着きました」

「なるほど。何にしてもよかったです。それじゃあ僕は仕事に戻るね。」

今度は人に迷惑かけちゃダメだからね

「かけてないよ」

「すみません。私から言つときます」

「ハハハ、あんまり妹ちゃんの手を煩わせちゃいけないよ。お姉さんだからしつかりしないかね。それじゃあ、元気でね」

そう言っておまわりさんは足早に駆けていった。

「さて、お父さんが心配してるし、早く帰ろう」

「私の父さんは放任主義だしね」

「お父さんほど過保護な親いないよ」

「そんなはずないよ」

「姉さんは嘘ばかり」

「お姉ちゃんも嘘ばかりじゃん」

私よりはマシだけどね。

お姉ちゃんを家まで案内して帰ってきた。

「ただいま」

「おかえり。丁度夕飯ができたところだ」

「おいしそうなおかずだね」

「姉さん、おかずなんてないよ」

「お父さん頑張ったんだがなあ……」

「父さんが夕飯当番のときのおかずよりはマシな方だよ」

「まあ、どんな酷評をしてもおかずが増えるわけじゃないし、食べよつか」

「そうだな。それじゃあ、いただきます」

「うん、おいしい」

「意外とおいしいね」

「お世辞で悲しい思いをしたのは初めてだ……」

「嘘をつくメリットないから嘘ついてないよ」

「え？嘘をつくのメリットなんているの？」

「まあ、嘘をつくときは大体は自分にとつて都合が悪いことを隠すときだからな」

「でも、ネットとかは嘘しか書かれてないけど、あれってどうしてなの？」

「ネット上の嘘は大体は自己顕示欲だよ。注意を惹きたくて、誇張表現になつてしまつたりするんだ」

「ふーん。それじゃあ、この前覗き見た父さんのブログの記事は正直に書いてるってこと？」

「人のブログを勝手に見てはいけません」

「え、駄目なの？」

「……駄目じゃないな。見せるために書いてるし」

「そろそろ眠くなってきた」

「食べてすぐ寝たら牛になるつてお母さんが言つてたよ」

「まあ、眠いなら無理に起きとく必要はない。娘よ、寝室まで連れて行ってあげなさい」

「えー、嫌なんだけど」

「そう言いながらも行動してくれる娘が大好きだぞ」

「気持ち悪いよ」

「本当に気持ち悪い」

「二人してひどいな」

「まあ、私は別に眠くないけど、おやすみなさい」

「ああ、おやすみ」

「あら、その子は？」

「もう、お母さんったら。私の姉さんだよ」

「どこかで会つたことがありますか？」

「うふふ、そうねえ。さ、こつちにいらつしやい」

「じゃあ私は寝るね。おやすみ」

「おやすみなさい」

この美人さんは私の母さん。私の親は母さんしかいないから、あまり迷惑をかけないように甘えるのを控えていた。

「ふふ、怯えちゃつて、可愛いわね」

そう言いながら、母さんは私を優しく抱きしめた。

「睡眠薬はしっかりと効いてるわね。それじゃあ、おやすみなさい」

その言葉を最後に、私の意識は途絶えた。

『ニュース速報です。』

女子児童（○歳）を縄跳びで縛り監禁、衰弱死させたとして、○○県に住む夫婦二人が逮捕されました。

調べに対し、「病弱な娘が欲しかった」と容疑を認めており、警察の調査が進んでいます』

『警察の取り調べに対し、妻○○被告は「虚言症の少女が近所の病

院に通っていることは知っていた。娘に頼んで連れてきてもらった」と供述しており、警察は計画的犯行だという見解を示しています』

『新たな情報です。夫〇〇被告は取り調べに対し、「妻がずっと二人目の子供が欲しい」と言っていたので、娘が知らない女の子を連れてきた時は黙認しました」と容疑を認めているとのことです』

『逮捕された夫婦の娘（〇歳）は「お母さんの言うことを聞かないとご飯が貰えなかった」等と証言しており、児童虐待についても捜査が進められます』

さて、本当の嘘つきはだれでしょう？

了

## 時を越える夢

如月 吟

私は家族に恵まれていないと思っていた。父と母に問題は無い。むしろ、好ましいと思っている。祖父が居なければ、恵まれていないとは考えなかった。家業を第一に考えて、私のことは後継ぎとして考えていない祖父。両親は私の夢を認めてくれていた。しかし、祖父は違った。

「そんな、非現実的な夢を追ってどうする。家業を継ぎなさい。」夢を否定し、自分が敷いたレールに孫を乗せようとする祖父。祖父と私は分かり合うことは無い。そう思っていた。

家業は下駄屋だ。年号が平成から令和に変わり、下駄を履く人なんて更に少なくなっているというのに、家族は下駄を作り続けている。そんな中、私は漫画家になりたかった。それも、ただの女子高生が有名企業の御曹司に告白されるような少女漫画や筋肉質な宇宙人が闘うような少年漫画ではない。コンプレックスを抱えながらも人の悩みを真摯に受け止め、解決し、笑いあり涙ありの日常系漫画である。しかし、祖父はそんな夢を受け入れてはくれない。私はそう考えていた。確信もあった。そのため、自室から出る時はいつも漫画道具と私の作品を鍵付きの箱にしまい、クローゼットの奥に隠していた。

紅葉の葉が綺麗に色づき、ニュースでは嵐山の紅葉の特集が組まれた頃だった。学校から帰宅すると、母が玄関で待っていた。いつもなら工房で女性物の下駄を作っているか、台所で夕飯の支度している時間だった。そのため、玄関で母が待っていることなどないはずだった。

「……おかえりなさい。」

「た、ただいま。」

私は何とか返事した。母の声音には困惑が混じっていた。いつも通り登校し、いつも通り学校で過ごし、いつも通り帰宅した私。そのため、母が困惑するようなことに私は心当たりが無かった。

「おじいちゃんの機嫌が悪いの。心当たりは無い？」

母は私を居間まで連れて行きながら、私に尋ねた。心当たりは一切無い。私と母は困惑しっぱなしで居間へと向かった。

居間には祖父と父がいた。祖父からは怒気が、父からは祖父への怯えと困惑が感じられた。中央にはクローゼットに隠してあったはずの箱があった。

「……中に漫画の道具が入っていた。どういうことだ？」

祖父の言葉を聞いて、頭から血の気が引いた。何故、祖父が、皆が箱の中に隠した物を持っている？何故、クローゼットに隠しておいたはずの物がここに？何故、箱の鍵が開いていた？頭の中でいくつもの疑問符がグルグルと渦巻いていた。

「え、あつ、えつと……。」

私の口から疑問の返答は出てこなかった。出たのは、間を繋ぐための意味の無い言葉だけ。何をどう説明すれば良いのか、私にはもうわからなかった。頭の中が真っ白で、何も考えられなかった。

「……机の上に置いてあった。鍵も箱の隣にあった。」

祖父の言葉に今朝の様子が脳裏に浮かんだ。今朝は少し寝坊したため、慌てて身支度したのだ。その時に箱を隠し忘れていたのだろう。私は、今朝の私に対して愕然とした。それと同時に弁解の余地が無いことを悟った。

「その箱と中身は私の物です。高校では漫研に所属していて、作品を描くのに必要だから購入しました。」

私の声は震えていた。声だけではない。手も、足も恐怖からか震えていた。それに、祖父の顔も恐怖から見えなくなっていた。俯いていたのだ。それでも、祖父の反応が気になった私は顔を少し上げた。祖父は毅然とした態度を取っていた。私は、祖父が機嫌を多少戻し

たと思い、安堵した

「漫研を辞めなさい。」

瞬間、私は世界が止まったような感覚に陥った。祖父は今なんて言った？部活を、漫研を辞めるように言ったのか？脳が理解することを拒んだ。

「なんで？」

私は言葉を絞り出した。ただ、祖父には祖父なりの理由があると信じて理由を尋ねた。

「将来、何の役に立つんだ？」

直後、祖父が言い切った。まるで、漫研に入っても将来の糧にならないと言っているようなものだった。

「そんな暇があるのなら、下駄の一つでも作ったらどうだ。お前は下駄屋の倅なんだから。」

祖父は続けて言った。私の夢よりも家業の心配をしている祖父の発言。私の夢を無視して、私の将来を決める祖父の思考。私は理解できなくなり、固まった。両親は何か言ってくれているようだったが、固まっていた私は何も理解していなかった。しばらくすると、頭が冷えた。そして、怒りが爆発した。

「私の将来を、勝手に決めないで！」

気づいたら叫んでいた。心からの叫びだった。突然の叫びに両親はもちろん、祖父すらも目を丸くしていた。

「私の趣味も、夢も、知らないのに、勝手に将来を決めないで！」  
続けざまに言った私は箱を奪い取って、家から飛び出していった。背後からは両親の制止の声が聞こえていた。

太陽が沈み、月が昇った。私は友人の家の窓から月を眺めていた。その後、近くの駅まで無我夢中で走り、登下校に使う電車で飛び乗った。車内で友人とのチャットを通して、家に泊めさせて欲しいと送った。直後、友人から返事が来た。止まっても良いという内容だった。そして、友人宅に転がり込んだ。

友人の部屋で私は、急に泊まらせて欲しいと言った理由を説明した。

「アンタとアンタの所のおじいさんって相性悪いよね。」

友人は困ったような、呆れたような顔をして続けた。

「アンタ、ちゃんと将来のこと皆と相談したの？しっかりと思い出してみ？」

将来の夢の話は両親とはした。記憶にしっかりと残っている。だが、祖父とはどうだったか。しばらく思い出し出していた。

「……祖父とは、無い。」

「やっぱりね。」

友人は分かっていたようだった。

「多かれ少なかれ、どんな子も将来について親と喧嘩するんだ。アンタの場合は、それがアンタのおじいさんだけ。」

友人は続けて言った。私と同年の筈なのに、友人の方が大人に思えて仕方なかった。

「……もしかして、喧嘩したことあるの？」

「あるよ、お母さんと。」

友人が私よりも大人だと思った理由が少しわかったような気がした。「アンタも落し所を見つけないよ。」

友人は、私を諭すように優しく言ってくれた。私は、友人に相談に乗ってもらってよかったと思えた。その後、私と友人は話し続けた。次に描く漫画の案や成績、日常のくだらないこと。私たちは布団に入っても話し続け、いつの間にか寝落ちしていた。

暗い。一面に広がっているのは漆黒の闇。光を一切通さない闇。私の周囲だけなのか、遙か彼方まで闇が広がっているのか。どんな空間なのかもわからなかった。

「わからなくて良い。」

声が聞こえた。闇の中を反響する声。誰だろうか？それに、ここはどこだろうか？

「私が誰なのか、わからなくて良い。ここがどこなのかも。」  
声は相変わらず反響する。女性の声という情報は分かった。しかし、姿は見えない。

「あなたにはある映像を見せよう。」

映像？何の映像を今から見るのだろうか？

「それでは、始めよう。」

目の前が光り始めた。

光が収まったと思ったら、昭和感が漂う女の子らしい部屋にいた。  
「どこだろう、ここ？」

手掛かりがあるのか、私は部屋を探索した。最初に目がついたのは本棚だった。古い少女漫画が並んでいた。手に取って読んでみよう  
と、本に触れた。しかし、手が本をすり抜けてしまい、触れること  
すらできなかった。

「っ！」  
恐怖から私は声に出ない悲鳴を上げてしまった。まるで、幽体離脱  
をしているかのように思えた。そこで、映像という言葉の思い出し  
た。

「……あくまで映像ってことか。」  
気を取り直して、探索を続けることにした。本棚から向かって左の  
壁には扉があり、その横にはカレンダーが掛けてあった。カレンダ  
ーには昭和四十七年と書いてあった。

「もしかして、過去？」

確かめるために、扉の反対側にあつた窓から景色を眺めた。目の前  
には開発が進んでいない田舎の風景だった。電信柱は木製で、幼い  
ころに見たジブリの映画を思い出させた。このことで、過去の映像  
を見ていることが分かった。私は探索を続けた。

探索の途中で下から喧嘩のような声が聞こえた。一人は男性の声  
で冷静に、もう一人は女性の声で感情的だった。女性の声はどこと  
なく暗闇の中で反響した声に似ていた。何について喧嘩しているの  
か、誰が喧嘩しているのか。気になった私は下の階に行こうとした。

しかし、行けなかった。扉のノブに手をかけようとして、すり抜け  
たのだ。

「漫画でもすり抜けていたな……。」

二回目のため、あまり驚かなかった。私は、扉をすり抜けて下の階  
へ降りた。内心、魔法使いの小説を思い浮かべていた。

下の階では、喧嘩が続いていた。私の姿が見えている場合、不審  
者扱いされてしまうため、壁に隠れて内容を聞いた。

「お前は下駄屋の娘なんだから、家業を継げよ。」  
「なんで、お兄ちゃんにそんなこと言われなきゃいけないの！」

どうやら兄弟は、家業のことで喧嘩をしているようだった。私は、  
家族と似ているなど感じていた。

「下駄屋に生まれたら、夢も持たずに下駄を作り続けなきゃいけな  
いの？」

「親父たちはそれを望んでいる。」

「だからって、私の将来を勝手に決めないで！」

部屋から私と同じくらいの少女が、私をすり抜けて階段を駆け上が  
っていった。その姿はまるで、家出した時の私のようなだった。それ  
と同時に、視界が白くぼやけ始めた。このままでは、少女の喧嘩相  
手が誰か分からなくなる。そう思ったため、慌てて部屋を覗いた。  
そこには、心配そうな表情を浮かべていた少女の兄らしき青年がい  
た。

「……おじいちゃん？」

青年は密かに見ていたアルバムの若かりし頃の祖父にそっくりだっ  
た。

強烈な光に包まれたかと思うと、また暗闇に戻っていた。目の前  
には漆黒の暗闇と少女が一人。階段を駆け上がった少女だっ  
た。

「ここからは私のその後を説明するわ。」  
暗闇に反響する少女の声。この空間に初めて来たときに聞いた声だ  
った。

「お兄ちゃんと喧嘩した後、家を出たわ。漫画家になる夢をかなえるためにね。」

私と同じ夢を持ち、叶えるために行動に起こした目の前の少女。きつと、辛く険しい道だったと私は思った。家族からの理解はなく、安定した収入もないのだから。

「有名な漫画家に何度も頭を下げて、アシスタントから始めたの。大変だったけど、充実していたわ。」

過去を振り返り、懐かしく感じている少女。

「漫画家としてデビューが決まった時はとても嬉しかった。先輩のアシスタントや同僚も祝ってくれて……。」

言葉が詰まって、少女は思いつめたような表情に変化した。この後、何かがあると私は感じ取ってしまった。心を引き裂くような、悲惨な出来事だ。

「……同時期にデビューが決まっていた同僚に殺されたの。私のアイデアが欲しいあまりの犯行でね。」

悲惨だった。映像で見たら、正常な人の心が壊れかねないぐらいの悲惨な事件。きつと私が見たら、トラウマになっていただろう。

「死体はすぐに発見された。同僚もすぐに捕まった。」

「……この事件は、貴女の家族にも？」

「知らされたわ。きつと、お兄ちゃんは悔やんでいるわね。無理にでも漫画から離してあげて。」

これがきつと祖父の根幹だ。この少女の事件と祖父の根幹がつながっている根拠はない。少女の家業が下駄屋で、少女の兄が祖父とそっくりなだけ。しかも、私の夢の中である。それでも、これが祖父の、私の意志を無視する本当の理由だと思った。

「さあ、もう起きる時間よ。」

また、強烈な光が私を包み込んだ。

友人宅で朝食を頂いた私は、すぐに帰宅した。祖父と話をした。夢のことは覚えている。夢の中の事件が本当に起こったのか。

それが原因で、私の意見は無視してまで下駄屋を継がせようとするのか。これらを確かめるために、私は祖父と話す。

「……ただいま。」

玄関には心配そうにしていた両親がいた。父はソワソワしているし、母の顔には涙の跡があった。

「すごく、心配したんだから！」

母はそう言うと、私を抱きしめた。私は嬉しいような、恥ずかしいような気持ちになった。

「……おじいちゃんと話をつけてくるね。」

私は祖父の元へ向かった。

案の定、祖父は下駄を作っていた。私は祖父に声を掛けようとした。

「帰ってきたのか。」

私の気配に気づいた祖父が振り向かず話しかけてきた。

「おじいちゃん。私の将来について話し合おう。」

私は祖父にハッキリと告げた。祖父は私を下駄屋に仕立て上げたいと思っているように、私は漫画家を目指している。そのため、友人が言っていた落とし所を探さなければならなかった。

「ああ、良いだろう。」

祖父と私は話し合い始めた。

そこからは、自分が持っている漫画への情熱を祖父にぶつけた。その中には、夢で知った事件も絡ませていた。私が持っている全てを使って祖父の説得を図った。祖父も私の夢の現実性や収入の不安定さをつけて、私を諦めさせようとしていた。私と祖父との話し合いは七時間にも及んだ。お互いが譲れないものを持つていたため、落とし所が見つからなかったのだ。話し合いが終わった時、祖父が私に向かってくれた。

「他人が決めた道筋を歩くのは楽だ。反対に自分が切り開いていく道は厳しく険しい。お前はそんな険しい道を自ずから選んだ。しつかり励めよ。」

私は、あの小さな事件が無かったら、祖父のことで恵まれていない  
と思いついていただろう。でも、今は違う。私はきつと恵まれてい  
る。

了

## 嘘誠

キツタヌ

「せんぱうい」

返事はない。いつも通り。

今日の先輩は、『ポールと仲間たち』と云う本を読んでいる。

タイトルと表紙の絵から察するに、ポールとは、アメリカ合衆国の伝説上の巨人。西部開拓時代の怪力無双の樵の事だろう。去年、先輩が話していた覚えがある。

時計を盗み見てから続ける。

「実は私、好きな人が出来たんですけど」

眉が動いた。珍しい。可愛い。嬉しい。

でも、返事はない。いつも通り。

「ちょっと先輩？放課後も今日みたいな日でも基本一緒に居る可愛い先輩が好きな人が居るって言ったんですよ？「ぼつと出の奴なんかより、俺にしるよッ！」ぐらいないんですか？」

先輩は重い溜息一つ零した。

「お前の相手がぼつと出かどうか俺は知らないし、そもそも俺はそんなに漫画チックな性格はしていないぞ」

知ってる。

「やだな。例えですよ。例え。先輩だつて分かって言ってるでしょ？」

自分でも驚く程にいつも通りだ。私の隠れた才能を見つけたかも

しれない。おそらく、先輩が相手だからなのだろうけど。色々な意味で。

「で、何だ？お前も知つての通り、俺に恋愛経験なんぞ無いし、男としてのアドバイスなんか無理だぞ」

「あら意外。協力してくれるんです？あの先輩が？」

先輩は少し黙した。

「……まあ、お前が言いたい事は分からんでもない。だがまあ、さつきお前が言つた様に、日頃一緒に居るお前になら協力するさ」

先輩は顔を逸らした。耳が赤い。珍しい。可愛い。嬉しい。

でも、本当に驚いた。先輩がそんな事言うなんて。

実は偽物だったり、空から王水が降ってきたりでもするのだろうか。

「ありがとうございます。先輩。でも、でもですよ？」

「なんだ」

「今日、四月馬鹿ですよ」

押し黙った。何かが切れる音がした気がする。

軽快な音が辺りに響く。

「痛いんですけど」

「馬鹿な事をするからだ」

「でも、予想外の収穫でした。先輩が私の事を憎かったり、邪魔だと思つてなかつたなんて。この痛みはコラテラルダメージだと思えば軽いものですね」

先輩はまた一つ、重い溜息を零した。

「だいたい、こゝろんなに可愛いくて勉強も運動もコミュニケーション

も完璧な私に見合う人なんてそうそう居ませんって」

先輩は黙って読書に戻った。いつも通り。

「だいたい陰キヤかつ二次元オタクなら、この手のイベントはむしろ把握しているんじゃないんですか？アニメでもゲームでも定番イベントらしいじゃないですか。特に最近のスマホゲームは、季節イベントがある。なんて言って。頻繁にスマホ触ってますよね？」

エイプリルフールのイベントの話は先輩から聞いた事ないので、ない  
のかもしれないけど。先輩が大好きなツイッタランドだったらこの手の話は盛り上がってるんじゃないんですか？」

返事はない。だけど、今回の沈黙は無視ではない。ぐうの音も出ていないだけだろう。先輩との会話で勝つたのは久しぶりだ。ふふん。

今日やりたかった事は終わったので、私もいつも通りに過ごしていたら、おもむろに先輩は口を開いた。

「俺は」

「はい？」

「俺はお前が、その……なんだ。好き、だぞ」

「うえ？」

先輩が恥ずかしがって、ぼそりと放った言葉に動揺が隠せずに変な声が出てしまった。とんだキラパスだ。

「馬鹿め。お返しだ」

「ああ、なるほど。引っかかった私が言うのも何ですけど、もうちよつと捻った方が良いと思いますよ」

「やかましい」

「それと、先輩。嘘ついて良いのは午前だけですよ」

「は？」

先輩は慌てて時計を見る。午前だ。先輩がふるふるし出した。可愛い。

「私は事実のシエアをしただけなので、先輩が勘違いしただけですよ」

今日の私は調子が良いのかもしれない。いや、先輩がおかしいのか。どうしたんですか？寒いんですか？抱きしめてあげましょうか？」

「……分かって言ってるだろ」

「もちろん」

どうやら、私の言葉で返せるぐらいには余裕がお有りのご様子。

先輩。なんだ。『好きな人』だったら、尊敬とか3eの可能性もあつたと思うんですけど。お前がその手の話をする時は、切り出しが  
だいたい決まっているからな。そうなんですか？ああ。無意識な  
らうな。



今日は、正直危なかった。

好きな人が出来た。なんて言われた時は、生きた心地がしなかった。今回は嘘だと言っていたが、それがいつか嘘でなくなる時を思うと気が遠くなりそうだ。俺には立てないそこに、いつの時か誰かが居る  
事が恐ろしい。その時、俺はあいつが望んだ俺として接してやれる  
の  
だろうか。コラテラルダメージだ。なんて言って、今まで見たどん

な  
時よりも素直に心から笑えていたあいつを、悲しませずにいられる  
だろうか。

◇

日付は何度も確認した。時計も朝から何度確認したか分からない。  
数十ではきかないと思う。大丈夫だと何度も自分に言いきかせた。  
正午までは未だ時間があつたけど、拍動は速さを増すばかり。深呼  
吸。

正直、気休めにもならなかった。扉を開けたらいつも通りに。  
頃合いを見て話題をふる。こういう時は、計画を綿密に立てない方  
が

楽だとおもった。実際そうだった様に思う。

望んでいた答えは分からなかったけれど、少なくとも先輩は私を  
嫌ってはいない様だった。こんな私を。

たとえ嘘であつたとしても、先輩が私を好きだと言ってくれて、  
どれだけ嬉しかったか。先輩はきつと全く分かっていないのだろう。

私は臆病で、ズルいから。こんな日でなければ、先輩の気持ちを  
確かめられない。

了

## 真綿で蛇を生殺し

キツタヌ

頭がナニかに犯されて、侵されていく。  
ぐちゃぐちゃで、何も分からなくなつて。  
楽しくつて、可笑しくつて。  
吐きそうで、痛くつて。  
締め込んで、曲げられて。  
飲み込んで、注がれて。  
拭い去つて、穢されて。  
嬉しくつて、悲しくつて。  
失つて、混濁して。  
狂わされて、壊して。  
可愛くつて、小さくつて。  
耽溺されて、とろとろで。  
美しくつて、艶やかで。

苦しくて、辛くつて。  
爛れそうで、凍り付きそうで。  
哀しくつて、落ちなくなつて。  
困われて、喰われて。  
耐えられなくなつて、生き残つて。  
残されて、心がつて。  
断たれて、甘くつて。  
嘘にまみれて、優しくつて。  
許されなくなつて、苛烈で。  
醜悪で、ミステリアスで。  
動かなくなつて、嗤つて。  
バラバラで、しつこくつて。  
過信して、視えてはいけなくて。  
変わらなくなつて、引き継いで。  
読んで、愛して。

終わりは何処？  
了



**A57A**

**ILLUSTRATION**



hino



Mino

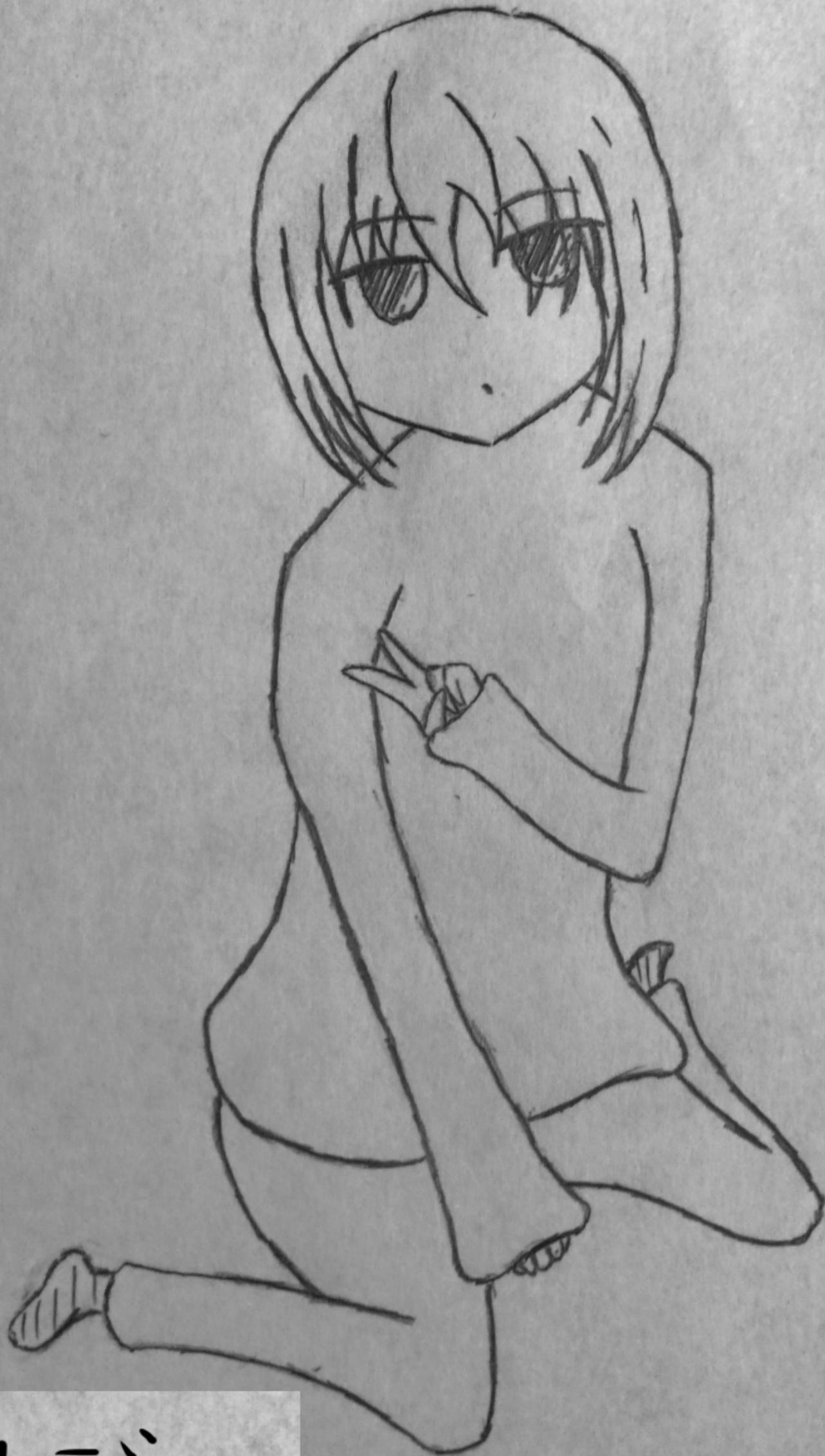


線画の描き方について……

あっこどん



おまけ



おはよう



しあわせ



冬月





**754**  
**C O L U M N**

## chiptuneのすゝめ

kauma

こんにちは、春会誌で音楽班の紹介コラムを書いてとあるジャンルの曲のhow to makeみたいなコラムを書こうと思いつつのんびりしていたらあつという間に時間が経ち結局書くことができなかつたkaumaです。今回で二回目のコラムですが自分自身が好きなジャンルのチップチューンというジャンルを布教：少しでも知ってもらいたいなあと思いついた次第です。オススメ曲とコンポーザーさんも知ってもらいたいで後に書くと思います。

チップチューンってなんですか？という方向けへの説明ですがこのジャンルを一言で言い直すと全体的のイメージとしてピコピコした楽曲の事を指します。丁度、世代的にファミコン、スーパーファミコンを知っている方なら想像が付きやすいと思います。

歴史としては1980年代辺りのパソコンや先ほど紹介した通りですがスーパーファミコンの普及と共に段々ジャンルとして定着していったようです。当時は、音を鳴らすための音源チップを使用した上でなおかつ音楽を作ろうと思うとハードウェア的に制限が多かつたばいんですよね。作れる波形が限られているとか同時発音数が少ないとか：それでも技術的にその辺りの問題を解決して多くの演奏技法（※特筆しませんが高速アルペジオや疑似ディレイ等があります）で色々な曲を生み出して例えばスーパーマリオだとかロックマンシリーズとかのBGMとして出されて有名曲が多いかと思えます。スーパーカーでのBGMも発音数こそ少なめですが割と有名だと思います。聞こう。

1990年代後半から世の中ではより制限が基本的に無くなるPCM音源というものが出てきますが制限が多い、作り手も大分チャレンジャーでチップチューンを愛する者がそんな音源で満足したと思えますか？満足するわけがないんですよね。依然変わりなく8bit機、所謂8bit音源が使える所で留まっています。

2000年代からはハード音源よりソフト音源で8bit音源を色々合成して音色作り重視で楽曲制作って風潮が出てきた感じですね。後は、今もそうですが8bit音源をメモロディにはするけど他は生楽器（ギターとかピアノとか）やサンプリング音源（ドラム類）を使った楽曲も多く出てきているかと思われます。でも、ソフトウェア上でもそれっぽくソフト音源を使いDTMという手段で手軽に作れるようになったのは良いと思います。勿論、楽曲制作自体簡単ではないですが。勿論今でも実機で楽曲制作している方は居ます。ゲームボーイのLSDJというのもありますし、PC上のエミュレーターでファミコンだったりゲームボーイのゲームソフトだったり動きソフトでもハードでもどちらでも制作が可能な時代です。本当に便利な世の中ですよね。歴史語りはここまでにおいてチップチューンの良さでも語りたと思います。

私が特にチップチューンで一番惹かれたのは「音色」ですかね。勿論、コンポーザーさんによつて変わりますが：どういった曲でも盛り上がるだとかエモいとかそういう印象を抱かせることはできるんですが、チップチューンにおいてただのパルス波や正弦波等しかも音色も色々合成できてボーカルのように強弱も表現できる高速アルペジオでアクセントも付けられるドラムっぽい使い方もできるというか大体何でもできる。めっちゃ最高じゃないですか。チップチューンのもう一つの音色以外の美味しさなんですけどコンポーザーさんの楽曲を聴く上で一人一人色々な工夫もまた見れて最高すぎ美味しいが結構効いてくるんですよね。勿論、他のジャンルでも同じ事は言えると思うんですがチップチューンの場合、発音数縛りがあつたつていうだけでも顕著に出てくるものかなと思います。

最後に、自分のオススメ曲とコンポーザーさんだけ紹介して締めたいと思います。

「Haunted Dance」 - Mr. Asyu

イントロも最高なんですけどサビがめっちゃ楽しくなれるなって思うしテンションが上がる曲です。基本的には8bit音源で表現している曲です。そしてこのコンポーザーさんは他にも楽曲をリリースしているけどそちらもかなり良いので聞いてください。

「CAST OFF」 - scythe

王道の道を征く…チップチューンです。メロディラインや音色が刺さるので一度は聞いてほしいですね…このコンポーザーさんも他に同様の作品をリリースしているのでそちらも聞いてほしいですね。

「咲かせ夏空、恋の花。」・ああああ+やどりぎ

夏の終わり、とある日の夜の夏空を思い浮かばせてくれるような一曲。イントロから切なさ一番盛り上がる部分でしっかりと感情も盛り上がりエモさを感じさせるぐらい良い曲です。体も震え上がるぐらいなので取り敢えず聞いて欲しいなあ…。これは合作曲ですが両方のコンポーザーさんも他に同様のチップチューン系の曲をリリースしているので聞いてほしいですね…凄く良いので…

もう一つ、ゲームからですがToby Foxさんが制作した「Undertale」や「Deltarune」内に収録されているBGMにもチップチューン系の曲があります。前者では「Bone Trousle」や「ASGORE」後者では「VS. Lancer」「Chaos King」をオススメしておきます。安心して聞け。勿論、これらの作品はチップチューン以外でも凄く良い曲があるのもそちらも聞いてほしいですね…

最後になりましたが、如何だったでしょうか。これを機にチップチューンが好きになっていただけたらそれだけで私は嬉しくなります。どうぞそちら側（沼）へともなって嬉しくなるオタクの舞を踊りだしたりします。

では、また何処かの会誌にて会いましょう。

## 観劇レポという名のただの感想の垂れ流し

あっここん

どうも、現在色んなジャンルの沼に足突っ込んで見事にやべーこと  
 になってるあっここんです。(笑)

今回は私が夏休みの間に初めて友人と一緒に観劇した『ミュージカ  
 ル刀剣乱舞 葵咲本紀(きしようほんぎ)』9月4日夜公演のレポを前  
 日譚も含めてお送りさせていたどころかなと思っております。

事の始まりは4月の中頃、誰かと刀ミュ(ミュージカル刀剣乱舞の  
 略)を見に行きたい!という気持ちが大きくなっていく中、新作公  
 演の発表と推しの千子村正が出るとの情報が!これはまじで誰かと  
 行きたい……とおもって明石推しの友人に籠手切江推しの友人と御  
 手杵推しの友人を紹介されたりチケツトが一名義2枚しか取れない  
 やらチケツトは取れたが御手杵推しの友人が予定が入っていけなく  
 なったりなんやかんやあつて籠手切江推しの友人(以下りっちゃん。  
 ちなみに彼女のTwitter上での名前から)と9月4日の夜公演に行く  
 ことになりましたハ。チハ。チ

さて、刀ミュの醍醐味と言えば一部の重厚なストーリーと二部の華  
 やかなライブと言っても過言ではないでしょう。そして!二部には  
 なんと客降り曲という一曲の間刀剣男士達が客席に降りてくる曲が  
 あり、運が良ければ刀剣男士達からファンサがもらえることがある  
 のです!

今回運良く通路のすぐそばの座席だったためもしかしたらファンサ  
 が貰えるかもと、前日に某所で行っちゃんとうちわをせつせと作っ  
 てました。

りっちゃんこういうのは初めてだと言っていましたがあめちやめちや

文字切り抜くの綺麗でした。(写真はりっちゃんと例のうちわ。手  
 が変なポーズなのはお互いタイミングミスったから笑)

私も誰かと刀ミュ行くことは初めてだし、誰かとうちわ作るのも初  
 めてだったのでめちやめちやテンション上がって浮かれポンチにな  
 っていました。しかしながら過去イチの出来栄えのうちわが出来た気  
 がします笑

(左の写真二枚)

そして来たる当日、物販が2時からだったので朝から日本橋をりっ  
 ちゃんと散策したりなんぼの地下でタピオカ飲んだりしてる時に、  
 なんと先述した明石推しの友人がたまたま同じ公演を見るとの情報  
 が!なんて偶然!(ハ)。

物販に並んだあと実際に会いに行きました。同じ中学だったのです  
 が卒業ごなんやかんやしばらく会ってなかった……と思つてたら去  
 年の夏に1回あつたような……まあそこは割愛。

そして明石推しの友人は鶴丸推しの友人と来てたのですがTwitterで  
 そういふ友達がいるつて言うのは知ってましたが、まさか知り合い  
 だとは知らず、まただいぶ印象が変わつたので思わず初対面のノ  
 リで話してました。発覚した時めっちゃ恥ずかしかつたです笑まあ

私もだいたい印象が変わってるからブーメランやぞと明石推しの友人に返されましたが笑

(下の写真はりっちゃんとタピオカとわたし)

さて、無駄に長い前日譚はこの位にしていよいよ舞台本編の感想レポと行きましょう！

簡単に言うとな今年の3月末まで再演していた『三百年の子守唄みほとせのこもりうた』に連なる話です。みほとせの簡単なあらすじは、徳川家康の父親とその家臣が時間遡行軍(刀剣乱舞での敵対勢力)によって殺されてしまったので刀剣男士が家臣に成り代わって家康を育てるという内容です。詳しい話は割愛しますが、DMMなどで配信されているので一度みてみることをオススメします。

Twitterの「みほとせ民は開始5秒ぐらいで死ぬぞ」と聞いていたのですが、まじで始まってすぐに涙腺が軽く死にました。ツライ村正派まじでツライ

そして場面は所変わって本丸、籠手切くんのソロ曲が入るのですが、籠手切くんまじでランカちゃんだった。何を言ってるんだとお思いかもしれないが、かわいいしその中にも芯がある様子がまじでランカちゃんだった。

あと御手杵とダンスレッスンしながら結城秀康の話をするシーンがめっちゃめっちゃかわいかった。時折結城秀康の話とダンスレッスンの内容とごっちゃになる御手杵まじでかわいかった。明石さんのギャップもすごかった。のらりくらりしているように見えてめっちゃめっちゃ周りのことを見る。喝も入れる。多分明石の印象100。ぐらいいらつと変わるんじゃないかってぐらいいかつこよかった。あとね、鶴丸もめっちゃめっちゃよかった。最年長って感じでめっちゃめっちゃ優雅でかつこいい。なんか彼だけがいろいろ察してるってシーンも多かった。…さすがに最後の方でポロポロになった事情説明を明らかに話す時はびっくりしたけど。そして村正派、めっちゃめっちゃしんどい。みほとせで受けた任務がまだ続いているのもあるし、みほと

せでは顕現したての人間0歳みたいだった村正が前作で起こったあの出来事が原因でめっちゃめっちゃ苦悩するシーンもツライ。ていうか今回みほとせから繋がっている内容でめっちゃめっちゃ涙腺刺激されたしかもいきなり検非違使(これもまたゲーム内の敵対勢力。歴史に干渉しすぎると出てくるいわゆるタイムパトロール的存在。ただし敵)が出てくるし、出てきた時の村正の行動がツライ。

とりあえず一部はこんな感じ、全然レポになつてないね！語彙力死んでるね！

そして二部、ミユ本丸の審神者のアナウンスから始まるんですが1曲目は光る棒(ペンライトのこと)を消してくれとのアナウンス、今までこんなことは無かったしなんやろうと思ってたらいつもはアンサンブルさんが最初パフォーマンスした後刀剣男士が出てくるのですが、今回最初から刀剣男士が出てきたようで、最初気づかなくて、「番上の衣装脱いだ時にすくびくくりしました。そのまま蜻蛉切のソロ曲に入るんですが、今回割とソロ曲が多かったような〜」刀剣男士達がそれぞれ自己紹介していくなか階段のセットの「一番上に寝そべる明石…蜻蛉切がテキパキとコールレスボンスの内容(回ごとにランダム)のようこの日は蜻蛉切で「明石ーやる気出してー」でした)を指示して、村正に雑じやないデスか?的なツッコミ受けてました笑私もあれー蜻蛉切さんめっちゃめっちゃ棒読みだなーとは思ってました笑そして鶴丸のソロ曲、まさか階段が増えるとは思ってもありませんでした。その後の村正のソロ曲も良かった…そして待ちに待った客降り曲！私達がいいた座席付近は明石と鶴丸と村正が来たのですが、刀剣男士みんなめっちゃめっちゃいい匂いするんですよ！いやこれマジで。至近距離だからすくく香ってくる。もう視覚と嗅覚で頭パンクするから正直曲覚えてない…って感じですよ笑

そして私のすぐ後ろの席の方、なんと明石さんからファンサ貰ってました。明石さん急に立ち止まって自分のすぐ後ろぐらいいを指さし

てニヤって笑ってふと後ろ見たらほぼ全面に明石の顔のイラストのうちわ持ったお姉さんが固まっていた。思わずおめでとうございますって感じで拍手送ってしまった私は悪くないと思う(笑)。そして自分も村正に手を振ってもらった気がするのだが、いかんせんハッキリ覚えてないものである…何せ通路のすぐ横でゼロ距離だったものだから……

そして客降り曲が終わったということはこの楽しかった時間ももうすぐ終わるということ、なんだかちよつぴりさみしい気もするけどライブパートラストの曲はみほとせの再演と同じ『闘魂歌』でした。あれめっちゃめっちゃかっこいい。歴史上人物の太鼓もめっちゃめっちゃかっこいい。

そして楽しい時間はあっという間に終わるもので、その後サイゼリヤで晩御飯食べて終電で自宅まで帰りましたとき。おしまい。

(ぶっちゃけ大和八木行なんか初めて見た。最寄まで帰ったら日付変わっててびっくり。)

## あとがき

いびきました。

高専祭にお越しの皆さん、どうもこんにちは！現代視覚文化研究会（略称現視研）秋会誌をお手に取っていただき、ありがとうございます！

自業自得なデスマ真つ最中な編集のタニイムです。何かを忘れると物理的でないナニカに強くなれることを非常にためにならない形で実感してます。とりあえず今は、睡眠が必要なことをワスレタイ：

：

そんな莫迦の話はさておき、高専祭、楽しんでますか？特にウチなんかはこの日のために1年間各々の手段で作品を制作しているといつても過言ではないので、昨年からの1年間がこの1冊にほぼほぼ詰まっています。

自分も小説を書いたりしてるので、たまに思うのですが……集まる小説作品に人柄が表れてるんですよ……自分の芸風（書き方）が大掛かりな神降しなので、ほかの人の芸風も気になってたりします。かくいう僕は、ぎりぎりで神を迎え入れました。

今年はこの時期まで台風が猛威を振るっていたり、寒暖の変化が落ち着かなかつたり、神がおりてこなかつたりと、（一つ個人的なものも混ざってますが……）いろいろおかしな年になっていますが、元号が変わった年なので、来年以降どうなるのか不安が高まるばかりです。

ところでかなり個人的なところに話は変わりますが、今年度入ってしばらくしたところに、それまで使っていたスマホが昇天しまして、今回の会誌の編集作業まで食い込むほどの被害がもたらされました。スマホみたいな連絡手段兼管理媒体だと、1台に全部任せせることも多いので、不慮の事故で一気に全滅……なんてこともあり得ます。これを読んでる皆さんもご注意ください。

……避けられない定めが近づいてきているので、今回はこのあたりでお別れしたいと思います。ここまでお読みいただき、ありがとうございます

タニイム